

岩津資雄著 「会津八一」

—近代短歌・人と作品・シリーズ第六—

加 藤 諄

岩津さんをはじめてお見かけしたのは、下落合の秋艸堂の庭であつた。会津先生は、何の草花であつたか、球根らしいものを植えて、あたりの土を軽くポンポンと手でたたいておいでになつた、その向うがわに少し離れて、同じようにしゃがんで、じいっと先生の手つきを見ていられたのが岩津さんであつた。二度目は、南の縁側の鳥籠の前で、古書か何かをだまて見ていらした。三十数年前のことで、いつであつたかたしかではないが、その光景だけは、私の眼の底に浮んでくる。私に話しかけて下さるようになったのは、ずっと後のことであつた。先生の書斎というよりも居間であり座敷であり、私どもを通して話をして下さるあの書物一ばいのお部屋では、岩津さんにお目にかつたことは、ほとんど記憶にない。私は、はじめ岩津さんを、先生の親戚の方か何かかと勝手に想像していた。

岩津さんと会津先生との関係は、この本の紀行篇、「秋艸堂の思い出」の中に、よく書かれている。とにかく岩津さんは、会津先生に最も親しい人であつた。もちろん先生から叱られるということのなかつた幾人かのうちの一人である。岩津家の墓石の字を

書いてもらつたという話を聞いたときなどは、不思議にさえ思つた。もっとも「槻の木」の都筑さんや染谷進さん（故人）などにも、先生は、大へん親しく接していられた。あるとき、雑司ヶ谷の槻の木の太木のかげには、窪田というものが構えていて、ものどもの歌をうしろからのぞいているんだ、と何かの折に語られてはいたが、しかし、そのころ先生は、歌壇というものを、全く気にしてはいられたかつたようである。歌といえば、「奈良の歌」以外にはなく、長い杖をついて秋篠への道をとぼと歩かれるときも、銀座や上野の山などでも、いつの間にか先生独自の調子で低吟しつづけておいでの事が多かつた。岩津さんは、そういう先生の日常を何から何まで知り尽くしている人である。しかも先生から離れて、先生をじいっと眺めていた人である。全く、この書を書く日のために秋艸堂を訪れていた人だ、と言つたら、岩津さんから叱られるであらうか。

実際に岩津さんの住居は、秋艸堂からも、文化村（昭和十年移転して滋樹園と号したがやっぱり秋艸堂と言つていた）からも近かつたせいもあり、絶えず先生に近づいていられたが、冷静で、信仰的崇拜といったようなこともなく、会津先生の複雑多面な学芸的生活を、深く見すえていられた。まことに渾身秋艸道人会津八一という不思議な魅力ある大存在を、よく語り得る資格ある人は、この著者岩津さんを措いて、他になかろうと思う。

その証拠に、「会津八一を知らないか！」という例の有名な臨終の言葉、近々十数頁の短かさに纏めた「道人の生涯」の最後、この言葉を、「冥府の鬼どもを睥睨して」「死魔に対する威嚇

の言葉ではなかったらうか」としたのは、さすがな解釈である。

先生は、まだまだお亡りになるような体力ではなかった。「一世を逍遙し、天地を睥睨して」なお余りある精神が、たしかに言わせたのであろう。余人の考え及ばない洞察である。

歌人会津八一研究においては、作歌の背景と、作者の歌風とが、最も重要な問題であるが、英文学、ギリシャ美術、東洋美術、書道金石、奈良美術、万葉集、和歌、俳句と多種多様な研究や、園芸、鳥飼、玩具、乗馬などの趣味のうちから、趣味、作歌、研究の段階をよく考察して「道人の作歌は奈良美術の研究に先行したもの」と論じたことは正しい。しかしながら作歌と研究の両面において、それぞれ鑑賞的態度と実証的態度というものが、歌風の上にかに関係をもつかということは、なおなお今後の研究を進めるべき余地があるように思われる。

本書の鑑賞篇に採られた歌は七十五首にすぎないが、一首一頁の制限で、道人調・万葉調を説明しながら、縦横自在に筆を振ったところは、著者の独壇場といわなければならない。鹿鳴集の歌解については、先生自註のものは別として、戦後間もなく出版されたものはあるけれども、しかも歌の数は二倍に及ぶのに、これは鑑賞の卓越、はるかに上質なものと思いたい。

要するに本書は歌人会津八一研究の第一書であり、これによつてますますこの方面の研究が展げ、珠玉神祕の佳什究明が深められてゆくことを祈る。

(桜楓社刊・定価五八〇円)

ペトロワ教授編著

A・タタリーノフ「露日辞典」

岡 一 男
金 本 源 之 助

オ・ペ・ペトロワ女史はアンドレイ・タタリーノフの「露日辞典」を、一八世紀ロシアにおける辞典編集の記念碑として、またロシア語を日本語に移した最初の意義ある業績として、ここでとりあげている。解説の前半においては、その史的位、及び成立由来を説き明し、後半においては、専門的な言語学の立場から、特に日本の東北地方の方言について鋭い考察を行っている。

この「辞典」には、実際に、はつきりした著者名もなく又刊行日も記されていない。わずかに表紙の下方に「にほんのひとさのすけのむすこさんばちござります」と七行からなる日本仮名が縦書きされ、真中に、A・A・Tの組合せ文字が記されているのみである。

ところが、オペトロワ女史は、ソ連科学アカデミー文書保管局に埋もれていた、「帝室科学アカデミー委員会議事録」(第三卷六二九頁)によって、一七八二年十月二十四日同委員会がイルクニック県知事の名のもとに、アンドレイ・タタリーノフの「露日辞典」を贈題として、取りあげたことを発見した。こうして女史は堅実な論証のもとに、「辞典」の著者「さんばち」がアンドレイ・タタリーノフであることを確認し、(表紙の組合せ文字、